米中接近と幻想の「東アジア共同体」

2009 年 9 月 20 日執筆
藤井厳喜（国際政治学者）

要旨:

- **鳩山民主党は、外交政策の基軸として、東アジア共同体構想の実現をあげている。これは日本にとっては最も悲惨な結果をもたらす外交政策構想である。何故なら、東アジア共同体に入るとは、即ち日本がシナの属国となる事を意味するからである。**

- **文明論的視野から分析して、ヨーロッパ共同体の成立は可能であったが、東アジア共同体の成立はもとより不可能である。本文でその事を詳しく解説する。**

- **米オバマ政権は、おそらくシナとは正面から対決せず、米中共同統治の方向を選択するであろう。これは日本には最悪の影響を及ぼすであろう。やがてアメリカはシナの真の脅威に覚醒するであろうが、それまでに東アジア全体にシナの政治的影響力が拡大している可能性がある。**

①文明論的に見た東アジア共同体の不可能性

鳩山新首相は、選挙中から東アジア共同体構想の実現について度々明言してきた。本来、外交・国防政策が殆ど表だって述べられていないマニフェストにおいても、主に経済政策として、東アジア共同体構想の実現がうたわれていた。東アジア共同体なるものが、いとも簡単に実現する、という前提で、鳩山首相は発言し、民主党のマニフェストは作られている。

幾多の苦難の道を経て、今日 EU(ヨーロッパ共同体)は成立している。何故、どのようにして EU が成立したかを厳密に考えるならば、EU 成立の理由は、そのままに東アジア共同体が成立する訳はない、その理由になっている。以下に、その理由を解説してみよう。

ｉ文明的・宗教的・政治的基盤

ヨーロッパ共同体が成立し得た最も大きな理由の 1 つは、キリスト教圏であるという事実である。ヨーロッパが 1 つの文明圏であり、その 1 つの文明圏の中にいくつもの国家が併存していたのである。それ故に EU の実現は可能であった。キリスト教文明の伝搬は、ヨーロッパ各地でかなり大きな時間差があったが、それでも最もキリスト教の伝搬が遅かった北ヨーロッパの事を考えても、ヨーロッパはほぼ千年に渡りキリスト教文明という 1 つの宗教文明を共有してきたのである。

アジアを見ればこの条件は全く成立していない。東アジアを、ASEAN(東南アジア諸国連合)10 カ国＋日米韓の 3 か国と捉えるにしても、これら諸国に共通した宗教的基盤は全く存在しない。寧ろ、目をひくのはその宗教的多様性である。シナは公的には唯物論の共産党一党独裁国家であるが、伝統的な儒教・道教が存在する。フィリピンは嘗ての植民地宗主国スペインの影響で、カトリック教徒が多数を占める国であるが、南部にはイスラム教徒を抱えている。タイは純然たる仏教国である。インドネシア・マレーシアはイスラム教国である。韓国にはカトリック、プロテスタント、儒教、仏教が混在している。ミャンマーは、専制的な軍事政権が支配するが、仏教が大きな力を持っている。社会主義国を標榜するベトナムでは、カトリック、仏教、その他、バオダイ教等の独自の宗教が併存している。この地域に広く住む華僑が主に儒教を奉じている事は確かであり、一方、この地域に併存するインド商人（印僑）は殆どがヒンズー教徒である。東アジア共同体にインドや南アジアを加えるとすれば、この複雑さは更に増大する。インドはその国民の 8 割はヒンズー教徒ではあるが、1億人強のイスラム教徒を抱え、他に少数の仏教徒やシーク教徒、その他、様々な宗教を内包している。スリランカでは、多数派は仏教徒だが、少数のイスラム教徒が在住している。

このように、東アジアはこの地域で生まれた宗教と他地域から生まれた流入した宗教により、宗教の博物館的な状況を呈しており、ヨーロッパとは寧ろその対極にあると言っても良い。共同体を成立させる最も基礎的な条件である、宗教的文明論的共通基盤が東アジアでは徹底的に欠如しているのである。

また EU 三か国の全てが民主国家であるのに対し、東アジアにはシナのような純然たる専制国家が存在する。これも又、東アジア共同体が成立し得ない大きな理由の一つである。

ⅱ 人種的・言語的共通基盤

ⅰを補って述べるならば、ヨーロッパのほぼすべての言語はヨーロッパ・インド語族に所属し、ヨーロッパ人の殆どは白色人種（コーカソイド）である。このような共通性も東アジアでは全く欠けている。

ⅲ歴史的経緯

ヨーロッパには嘗てローマ帝国という大帝国により統一されていたという共有する歴史が存在する。ローマは北ヨーロッパを統治する事は無かったが、それでも今日ヨーロッパ各国の国民がローマの歴史をヨーロッパ全体の歴史の一部と見なしている事は確かである。このローマ帝国が解体する事により、近代の国家であるイギリスやドイツやフランスやイタリアやスペインが誕生して来た。そして誕生したこれらの近代諸国家は相互に覇を競いつつ、数百年間に渡って闘争と共存を続けて来た。ヨーロッパ諸国は二度の大戦を経験し、最早闘争に疲れ果て、統合への道を歩んだともいえる。過去に統合されていたという共通の歴史を持ち、これが分裂し、長い闘争期間を経て再び統合する事を決意したのがヨーロッパの歴史である。このような歴史的経緯は東アジアには全然存在しない。

以上のような文明論的な解析を全く無視して、鳩山首相はいとも簡単に東アジア共同体構想を語っている。まさに宇宙人的な頭脳の軽さという他は無い。

②東アジア共同体は、シナ帝国である。

東アジア共同体構想を 1998 年ぐらいから最も積極的に推進して来たのはシナである。今や東アジア共同体というのは、シナ外交にとっては、東アジア全体をシナ帝国主義が侵略し支配する為の口実に過ぎない。それは看板に書かれた文字であり、東アジア共同体の実質は、東アジアに君臨するシナ帝国主義の完成である。シナ流の四文字熟語を使うならば、まさに羊頭狗肉である。日本が東アジア共同体に参入するとは、日本が自ら進んでシナの属国になり、シナの植民地になる事を意味する。

東アジア共同体が実現すれば、一千万人単位のシナ人労働者が日本に入り込み、それらの外国人が参政権を獲得し、シナの低賃金による低価格商品が日本の産業を破壊し、シナの国営企業がその富により、有力な日本企業を買収して吸収してしまう。先ずはそのような状況が日本を襲う事は確かである。シナは核兵器を所有する軍事大国であり、我が日本の外交は今や友愛外交である。この両者の関係でどのような事が起こるかは火を見るよりも明らかである。日本はやがてシナに編入され、ウイグル人やチベット人や南モンゴル人のように、「倭族自治区」の少数民族の立場に追いやられるのであろうか？

③米中共同統治時代の到来

アメリカとシナの世界観・価値観はあまりに異なり、この二カ国が長期に渡り、友好関係を維持していく事はもとより不可能である。しかし、19 世紀以来アメリカの中には根強いシナ幻想が存在し続けて来たし、今も存在している。そもそもアメリカ人はシナ人の実態を知らず、19 世紀においては、シナ人全てをキリスト教化し文明化する事が可能であるというシナ幻想が蔓延していた。この為に多数のアメリカ人宣教師がシナに渡り、命を落とし、あるいは人生を浪費した。今日においては 13 億の巨大マーケットという幻影がアメリカ人を支配している。またキッシンジャー氏やブレジンスキー氏はその大陸地政学的思考からして、シナ人と大変馬が合うようである。

落ち目のアメリカは、米国債の大量購入でシナに頼らざるを得ず、その価値観の基本的相違にもかかわらず、米オバマ政権は米中友好と連携の方向に動きつつある。本来、アメリカが批難しなければならないシナ国内の人権問題については、口を閉ざしたままである。この傾向が進めば、東アジアは米中両国が共同統治する状況となる。この時、シナは徐に台湾の併呑に動くであろう。台湾の次のターゲットは日本であり、特に沖縄である。

長期的にはアメリカはいつかシナの真の脅威に目覚めるであろうが、その時には既に手遅れになっている可能性もある。アメリカには、嘗てスターリン主義のソ連を同盟国と成して大きな誤りを犯した歴史がある。

民主党にはそもそも整合的な外交・国防政策は存在しない。まして友愛は外交の基本原則とは成りえない。誰が友であり、誰が敵であるかを識別する事こそ外交の基本である。友愛外交が日本を破壊する前に、一刻も早く民主党政権を歴史の舞台から退場させなければならない。